

美術館とリノベーション

—周辺地域への影響を中心に—

藤 澤 まどか

1. はじめに

本研究では、美術館とリノベーションについて、美術館の周辺地域への影響を中心に考察することを目的とする。そのさい、美術館の公共性の保障や美術館建築の開放性についても視野に入れるが、博物館（美術館）での居心地の悪さに関して、「多くの以前の博物館（美術館）は宮殿のようにデザインされ、人々の宮殿となるように意図されていたかもしれないが、実際は、たやすく人々にエリートを連想させる」⁽¹⁾ことが述べられているように、美術館建築の在り方と美術館への近づきやすさは深く関わっていると言える。そのため、美術館の公共性を保障するうえでも、様々な人々が訪れやすく、人々や社会に開かれた活動を可能にするような美術館建築の開放性が重要であると考ええる。

そのため、「宮殿」のような在り方ではない美術館建築を考える一つの視点として、既存の建築物をリノベーションし、美術館として活用している事例に着目する。特に、イギリスのテート・モダン（Tate Modern）、イタリアのプンタ・デラ・ドガーナ（Punta della Dogana）、富山県の入善町下山芸術の森発電所美術館（以下、発電所美術館）等を事例に取り上げる。テート・モダンに関しては、「近年オープンしたヨーロッパの美術館の中で、集客という点において最も成功したものの一つ」⁽²⁾とされたり、「ロンドンの貧困地帯サザクの活性化に劇的効果を上げた」⁽³⁾とされたりしているが、既存の建築物をリノベーションして美術館建築として再活用するだけでなく、テーマごとに分けて展示するという特徴も持っており⁽⁴⁾、重要な事例であると考ええる。また、イタリアでは文化財と景観財の総称である文化遺産の保護が行われており⁽⁵⁾、プンタ・デラ・ドガーナのあるヴェネツィアは、古い地区では建て替えはできず、「歴史的な都市を保存する考え方が確立した」とされる⁽⁶⁾。そのため、リノベーションについて考察するさいにも、美術館と周辺地域の関係性を捉えるうえで注目に値すると思う。そして、発電所美術館に関しては、日本でのリノベーションについて考えるさいの一つの手がかりとして取り上げる。

さらに、本研究では、リノベーションされた美術館建築が周辺地域にもたらす影響として、三つの観点から考察することとする。

第1に、リノベーションされた美術館と既存の建築物が保有する歴史性との関係に着目する。それは、美術館として再活用される建築物は、美術館として開館する以前から地域に存在しており、当時の役割や機能は、地域の人々の記憶や歴史の中に息づいている側面があるため、周辺地域に対する影

響力は看過できないからである。

第2に、美術館とリノベーションに関して、特に、美術館以外の用途で使用されていた建築物を美術館として再活用するというコンバージョン（用途変更・転用）⁽⁷⁾に注目する。前述のように、既存の建築物が持っていた役割や機能を記憶や歴史として残しつつも、美術館に特有の役割や機能が加えられることで、美術館への入りにくさ・閉鎖性を緩和することに結び付くのではないかと考える。

第3に、美術館としてのリノベーションと地域再生との関わりである。特に、美術館としての再活用によって新旧の要素が混ざり合うことになるが、美術館の周辺地域に視野を広げて考えた場合にも、既存の建築物が美術館に転用されることによって、地域を再生する要素が入り込むのではないかと考える。しかしながら、第1の観点でも述べたように、既存の建築物の歴史性も存在していることを踏まえると、新旧両方の要素が混ざり合うことによる作用に注目する。

このような観点から、美術館とリノベーションについて、周辺地域への影響を中心に考察していきたい。

2. リノベーションの定義

上記の観点から考察する前提として、リノベーションの定義について整理するが、そのさいに、建築の分野での定義を参考にする。特に、リノベーション（renovation）については、「①既存の建物を建て替えることなく大規模な改修工事を施すことで、用途や機能を変更し、性能向上を図り、建築の価値を高めること。外壁の補修、建具や窓枠の取り替え、間取りの変更、給排水設備・冷暖房換気設備の更新をはじめ、耐震性・防火性の強化、省エネルギー化、IT化などが含まれる。②都市開発の分野では、リニューアルと同じ意味で使われる」⁽⁸⁾とされる。そのため、コンバージョン（conversion）とも密接に関わっていると考えられるが、コンバージョンについては、「既存建物の用途を転換し、再生、利用すること」⁽⁹⁾とされる。

そのため、リノベーションに関しては、建築物のハードとソフトの両面を含むものであり、コンバージョンは、「転用」や「用途変更」という機能の変化を重視したものであると理解できる⁽¹⁰⁾。また、松村秀一は、日本でコンバージョン事例が目立たなかった理由として、建築物の寿命が短いことを挙げ、「需要の構造が変わると、それに合わなくなった建築物を簡単に取壊し、新たな用途の建築物に建替えてきた」ことを指摘する⁽¹¹⁾。ここでの建築物の寿命の短さとは、日本の建築物の仕様が貧しくて老朽化が速く進むことを意味するのではなく、「建築物の取壊しの理由を調べた複数の調査結果が物語っているのは、むしろ日本の多くの建築物が、その物理的な耐用年数を全うすることなく、主として機能上の原因や経済的な理由で取壊されている」ことから生じている⁽¹²⁾。そのため、リノベーションやコンバージョンという手法を採ることで、建築物を使用できる期間を延ばすことができるようになると言える。したがって、「スクラップ・アンド・ビルド」から「キープ・アンド・チェンジ」へと移行することにもなり⁽¹³⁾、建築物の機能を更新させながら、歴史性を有効に活用したり、新たな役割を建築物とともに見出したりすることを可能にさせると考える。

3. リノベーションされた美術館建築の周辺地域への影響

(1) 美術館と既存の建築物の歴史性

上記のことを踏まえて、美術館と既存の建築物の歴史性の関わりについて考察する。既存の建築物は、以前から地域の中でランドマークとして位置付けられている場合もあるが、リノベーションは「すでにあるものを微細に観察すること、すなわち『注視』から出発する態度である」⁽¹⁴⁾とされるように、地域の文化や歴史、様々な価値を再確認することにもつながっていると言える。

例えば、テート・モダン【写真1】は、1947年に建設された火力発電所⁽¹⁵⁾をリノベーションし、2000年にヘルツォーク & ド・ムーロン（Herzog & de Meuron）の設計によって美術館として開館した⁽¹⁶⁾。テート・モダンは現在もその一部が発電所として使用されているが⁽¹⁷⁾、「この建物が発電所であったことを全然隠していない」⁽¹⁸⁾と指摘されるように、タービン・ホールや中央の煙突といった以前の建築物の要素を活かしてリノベーションが行われている。そのため、「宮殿」のような美術館というよりは、発電所としてまちの中に溶け込んでいる側面が強調され、その様子が周辺地域の人々の記憶と重なったり、様々な人々の美術館のイメージへと引き継がれたりすると言える。

また、テート・モダンは、テムズ川を挟んで対岸にあるセント・ポール大聖堂（St. Paul's Cathedral）⁽¹⁹⁾と対面しており、新旧のランドマークとして相互に意識できる位置にあることから、建築物を通してまちの歴史が継続する様子を体現する側面もある。

次に、プンタ・デラ・ドガーナ【写真2】に関しては、安藤忠雄建築研究所（Tadao Ando Architect & Associates）によってリノベーションの設計が行われたが、以前は15世紀から使用されていた海の税関（Dogana di Mare / Dogana da Mar）として機能しており、17世紀にジュゼッペ・ベノーニ（Giuseppe Benoni）によって改築され、その後も様々な変形と修復の作業を経ている⁽²⁰⁾。そこで、「①度重なる改造で見えにくくなっていた、建設当初の建物の姿を取り戻すこと（＝建物に刻まれた歴史を掘り起こすこと）」、「②①の上で、その旧さと拮抗するような現代性を感じさせる空間を建物の内



写真1 Tate Modern（撮影：筆者）



写真2 Punta della Dogana（撮影：筆者）

に内包させること（＝場所を活性化させるような新旧の対話をつくりだすこと）」が計画のテーマであった⁽²¹⁾。そのため、海の税関としての機能から美術館としての機能へと変更されつつも、以前の建築物の歴史を感じられる構成になっていた。その結果、作品鑑賞のさいにも、新築の建築物やホワイト・キューブの展示室とは異なった展示空間を形成することとなり、以前から使用されていた煉瓦や木材等の素材を活かしながら、作品鑑賞と建築物の歴史性が結び付く側面が見出せる。

この背景には、イタリアの文化財と景観財の総称である文化遺産の保護に対する姿勢が関わっていると考えられるが、「イタリアの歴史的都市が大規模な都心再開発をさせ、歴史的建造物の保全的活用を政策的に選択してきたことは、都心への資本回帰を妨げることなく、むしろ歴史的都心部の資産価値を高める方向に作用した」⁽²²⁾とされるように、建築物が保有する歴史性を積極的に認める方向が読み取れる。つまり、プンタ・デラ・ドガーナに関しても、美術館として活用される以前の建築物の歴史的な価値を継承するとともに、リノベーションによって取り入れられた建築的な素材⁽²³⁾や展示される現代アート⁽²⁴⁾といった新たな要素を含みながら、美術館建築の歴史性と美術館活動とがつながっていることが理解できる。



写真3 入善町下山芸術の森発電所美術館
(撮影：筆者)

また、発電所美術館【写真3】に関しても、1926年に建設された水力発電所を活用し⁽²⁵⁾、1995年に三四五建築研究所の設計によって美術館として開館した⁽²⁶⁾。美術館以外の建築物を活用している点で、テート・モダンやプンタ・デラ・ドガーナと同様の事例であるが、同美術館の内部は、タービンや機械類に加えて、壁には導水管の穴が二つ残されている⁽²⁷⁾。つまり、産業遺産としての価値に加え、黒部川扇状地の歴史を伝え、当時の趣を残す建築物は、建築物自体が歴史的価値を持つ資料として位置付けられるため⁽²⁸⁾、周辺地域の歴史や関係性を改めて考える契機にもなる。

このようなことから、上記3館の美術館としてのリノベーションには、建築物の歴史性を踏まえた新旧両方の価値を認める姿勢が読み取れ、継承と創造の双方の作用が見出せる。さらに、美術館としてのリノベーションの過程には、地域の特性や独自性の再発見とその特性や独自性を明確にするプロセスが含まれていると考えられる。

(2) 美術館へのコンバージョン

次に、既存の建築物が美術館としてコンバージョンされることに注目する。例えば、プンタ・デラ・ドガーナの場合、「すぐれたアートには建築とコラボレートして、場所を活性化させる力がある」ため、「展示される現代アートとリノベーションした建物の刺激的な対話を期待し、いかにして歴史

ある建物のゆえの特質を顕在化出来るかというところに腐心」し、「その意図のもと、既存のトップライトや海を臨む窓など、必ずしも美術館建築のセオリーに合致しない要素でも、積極的に展示空間を構成する要素として生かすように」されている⁽²⁹⁾。同様に、テート・モダンに関しては、タービン・ホールや煙突といった要素があり、発電所美術館に関しても、タービンや機械類や導水管といった要素があるが、美術館に必ずしも必要とされない要素を取り入れている。

そのため、美術館以外の目的で建てられた建築物を使用することによって、美術館活動や美術館建築の機能等とのズレや差異が生じるが、このようなズレや差異によって、美術館の閉鎖性を緩和し、開放的な空間を構成することができるのではないかと考える。つまり、美術館への入りにくさを軽減するきっかけを含むとも言えるが⁽³⁰⁾、当該地域の日常的な風景を構成していた建築物を美術館に転用したことによって、美術館や作品（アート）が日常生活から乖離して存在するのではないことを強調する効果があると考えられる。これに加えて、美術館としてのコンバージョンによる建築物の機能の変化に伴って、建築物の意味も変容し、様々な人々が利用できるような場所として蘇ったことを示す側面もある。このようなことから、美術館建築の開放性が創出し、人々が美術館に対して親近感を持つ契機になると言える。

また、松村秀一は、コンバージョンの社会的な意義として、「ストックの有効活用」、「都市再生の方法」、「新しい形の住宅供給」の三つの側面を挙げており、特に、「都市再生の方法」の観点については、「コンバージョンは一棟一棟の既存建築物を対象としてはいるが、その行為がある地域の中で面的に展開されていくことになれば、やはり新しい時代の要請に相応しい形で都市を再生することにつながる」だけでなく、「既存の都市の組織を引き継ぐ形で地域環境の再生が進められる可能性がある」とする⁽³¹⁾。そのため、コンバージョンという建築物の機能の変化を、継承というかたちで取り入れることで、周辺地域との関係構築の契機となって、周辺地域との関係の中でコンバージョンを捉えることを可能にさせる。

（3）美術館としてのリノベーションと地域再生

そして、美術館としてのリノベーションによって、美術館や作品（アート）といった新しい要素が入り込むことになり、従来の人の流れとは違う流れが生み出されて、まちの様子や機能が変化する側面がある⁽³²⁾。例えば、テート・モダンが開館する以前から、後にテート・モダンとなる「新しい近現代美術のテート・ギャラリーは、世界の中心地として都市の地位を高め、文化的・社会的・経済的な利益を何百万の人々にもたらす、ロンドンの中心にある刺激的な新しいランドマークとなるだろう」⁽³³⁾とその役割を期待されていた。つまり、美術館としてのリノベーションによって、様々な効果を生み出し、周辺地域を変容させる側面に着目していたと言える⁽³⁴⁾。さらに、ブンタ・デラ・ドガーナに関しても、エミリオ&アンナビアンカ・ヴェドヴァ財団（Fondazione Emilio e Annabianca Vedova）の塩倉庫（Magazzini del Sale）とストゥディオ・ヴェドヴァ（Studio Vedova）、ペギー・グッゲンハイム・コレクション（Peggy Guggenheim Collection）等が近くにあり、対岸のサン・マルコ

広場やサン・マルコ寺院に代表される歴史的建造物とのつながりを保持しつつも、近現代美術を取り入れた地域を形成している⁽³⁵⁾。また、カナル・グランデ（Canal Grande）対岸で近隣に位置するフランソワ・ピノー財団のパラッツォ・グラッシ（Palazzo Grassi）との関係は看過できず、「海上のアートネットワークが生まれることが、都市にとって重要」⁽³⁶⁾と考えられていた。

つまり、「3. (2) 美術館へのコンバージョン」でも述べたが、地域全体を視野に入れることで、地域再生がスムーズに行われる基礎になると考える。それは、美術館が単体で活動することでは得られないような魅力の創出に関わるからである。

4. 美術館のサイトスペシフィックな性質の顕示

以上のことから、美術館とリノベーションについて考えるさいには、美術館自体の“サイトスペシフィック”（site-specific）⁽³⁷⁾な性質を強調する側面があることに留意する必要があるだろう。特に、サイトスペシフィックという用語は、美術館に展示されている作品の性質に対して使用されることが多いと思われるが、来館者が作品鑑賞を行う空間を形成する建築物に関しても同様に当てはまる性質であると考ええる。そのため、美術館自体の特徴を形成するものであり、その特徴の中には、美術館と周辺地域との関係も少なからず含まれていると言える。もちろん、新しく建設された美術館に関しても、このような性質を保持している場合があるが、美術館建築の中に地域の記憶や歴史性が含まれたり、新旧両方の要素による相互作用が生まれたりするのは、リノベーションされた建築物だからこそ生じる効果であると考えられる。

例えば、プンタ・デラ・ドガーナのリノベーションによる建築物の特徴点として、「特に外観については、長年受け継がれてきた都市の風景の保存ということを大切に考え、建設後の建物に刻まれた時間をも一緒に残すよう考え」⁽³⁸⁾たことが挙げられる。さらに、「かつて『海の税関』としてあった建物の記憶を呼び覚まし、同時に建物に刻まれた都市の記憶を丁寧にひろいあげた上で、建物の内部中央の、後の改造による二列分を一室としたスペースについては、例外的にそのままの形に留め、さらにその内にコンクリートボックスを挿入して新たな空間を創り出し、「建物の中心に仕掛けられた新旧の対話が、建築に刻まれてきた時間を、現代、未来へと結びつける原動力となることを期待」したことがある⁽³⁹⁾。そのため、プンタ・デラ・ドガーナ自体が内包する新旧の要素に加えて、ヴェネツィアの風景とプンタ・デラ・ドガーナのリノベーションによる新旧両方の要素も、現地でしか体験することができないと言える。また、プンタ・デラ・ドガーナの展示室に設けられている窓や扉から周囲を取り巻く海やヴェネツィアのまちを眺めることができるため、絶えず周辺環境・周辺地域を意識することになる。

つまり、美術館のサイトスペシフィックな性質は、美術館建築のみによってもたらされる効果ではなく、美術館を取り巻くまちの様子や周辺環境・周辺地域の特徴とともに形成されると言える。特に、テート・モダンに関しては、2000年に完成したミレニアム・ブリッジ（Millennium Bridge）⁽⁴⁰⁾やセント・ポール大聖堂といった新旧の要素を目にすることができたり、発電所美術館での展示作品に関

しては、基本的に現地制作が多く、空間に合わせた作品が設置されているため、同美術館でしか見られない展示が行われたりしている⁽⁴¹⁾。

そのため、サイトスペシフィックな性質は、人々を美術館に引き付ける魅力を生み出すことに加え、当該美術館の特性やオリジナリティを確立する要素になると言える。さらに、サイトスペシフィックな性質が強調された美術館は、美術館の周辺地域に対してもその地域の特性やオリジナリティを明確にする契機を含むと考えられる。したがって、美術館のサイトスペシフィックな性質は、美術館を周辺環境・周辺地域との関係性の中で捉える視点を明示する側面がある。

5. おわりに

以上のことから、美術館とリノベーションについて、周辺地域への影響を中心に考察すると、以下の2点が重要であると考えられる。

第1に、リノベーションを行うことで、既存の建築物に含まれる歴史性を活かしたり、コンバージョンによって、美術館以外の目的で建てられた建築物から生じる美術館活動や美術館建築の機能等とのズレや差異を含んだりするため、美術館建築の開放性の創出に寄与する側面が見出せる。特に、美術館周辺の地域住民にとっては、日常生活の中に溶け込んだ建築物を利用することになるため、美術館に特有の閉鎖性を減少させ、親しみを持って美術館を捉える契機となる。さらに、美術館以外の建築物を活用することで、異分野とのコラボレーションの可能性を示唆するとともに、あまり美術や美術館に興味のない人々にも美術館を訪れやすく感じさせる契機が含まれていると言える。このようなことから、美術館建築の開放性が生まれ、美術館の公共性の保障にも寄与すると考えられる。

第2に、美術館としてのリノベーションによって、サイトスペシフィックな性質が強調されることが挙げられる。このような性質は、以前の建築物が保有する歴史性と関わるだけでなく、美術館と周辺環境・周辺地域との関係性の上に成立するものであると言える。つまり、リノベーションを通して美術館と周辺環境・周辺地域の関係性を再考したり、美術館の周辺地域の住民や周辺環境とのネットワークの形成に関わる視点を明示したりする作用が含まれると考えられる。また、リノベーションを行うことによって、新たな人の流れを形成し、地域再生に寄与する側面も見出せる。

このようなことから、美術館とリノベーションについて、周辺地域への影響を中心にとすると、美術館建築の開放性の創出に寄与するだけでなく、周辺環境・周辺地域との関係構築にも密接に関わっている。そのため、美術館建築という限定された問題ではなく、様々な関係性を含み、歴史性の観点からも、公共性の保障と関わる事柄であると考えられる。

【謝辞】

本研究の調査にご協力頂きました、安藤忠雄建築研究所・安藤忠雄氏、安藤忠雄建築研究所・岡野一也氏、Palazzo Grassi / Punta della Dogana, Marco Ferraris 氏、入善町教育委員会事務局主任学芸員（当時）・長縄宣氏、また、調査にさいしてご協力頂きました方々に感謝申し上げます。

- 注(1) Timothy Ambrose & Crispin Paine, *Museum Basics*, Second Edition, London & New York: Routledge, 2006, p. 20.
- (2) 中川理「まちづくりから求められる美術館」並木誠士・中川理『美術館の可能性』学芸出版社, 2006年, p. 189.
- (3) Karsten Schubert, 松本栄寿・小浜清子訳『進化する美術館—フランス革命から現代まで』玉川大学出版部, 2004年, p. 108。(また, カーステン・シュバート (Karsten Schubert) は, テート・モダンの異例な点として, 政治家の発案ではないこと, 都市の再開発計画の対象ではないことを挙げている。(同前, p. 122。))
- (4) 2010年5月-10月では, 「Poetry and Dream」「Material Gestures」「States of Flux」「Energy and Process」となっている。(「Tate Modern Map」(May-October 2010), リーフレット参照。)
- (5) 稲葉信子「イタリア文化財保護制度の現在」独立行政法人文化財研究所 東京文化財研究所 国際文化財保存修復協力センター編『イタリアの文化財保護制度の現在』叢書「文化財保護制度の研究」ヨーロッパ諸国の文化財保護制度と活用事例 [イタリア編], [独立行政法人文化財研究所 東京文化財研究所 国際文化財保存修復協力センター], 2006年, pp. 8-15, 及び, マッテオ・ダリオ＝パオルッチ (Matteo Dario-Paolucci), 大竹秀実訳「イタリアと日本における文化的景観の保存」同前, pp. 94-107 参照。
- (6) 陣内秀信「ヴェネツィアの多様な住宅建築」饗庭孝男他『ヴェネツィア 栄光の都市国家』東京書籍, 1993年, p. 212。
- (7) コンバージョンに関しては, 「日本語では『転用』, 『用途変更』という語が該当する」とされる。(松村秀一「コンバージョンによる都市再生」長澤泰他編『建築大百科辞典』朝倉書店, 2008年, p. 121。)
- (8) 土肥博至監修, 建築デザイン研究会編著『建築デザイン用語辞典』井上書院, 2009年, pp. 390-391。(なお, リニューアル (renewal) に関しては, 「原意は『更新, 復活, 再生』など。古くなって時代の要請に応えられず, 衰退傾向にある地区などに対して, ハード, ソフト両面で改修や新機能の導入を行って地区の再生を図ること」とされる。(同前, p. 390。))
- (9) 同前, p. 149。
- (10) これに関しては, コンバージョンを「建築物の『用途変換』つまり, 従来の用途を他に変えることによって, 新たな利用価値を生み出す行為」とし, リノベーションを「建築物の『機能更新』つまり, 従来の用途はそのまま, その老朽化した部分を新しく補修したり, 古いシステムや設備を最先端のモノに置き換えたりすることにより, 従前の機能を高度に再生化する行為」とし, 「『コンバージョン』は常にハードウェアとしての『リノベーション』と対となって, 新たな用途変換を高いクオリティのものとして実現することが可能」であると定義するものもある。(フィットリアルエステート株式会社 (齊藤博)『コンバージョンへの挑戦』文芸社, 2002年, pp. 23-24。)
- (11) 松村秀一「いま, なぜコンバージョンか」『近代建築』Vol.57 No.1, 近代建築社, 2003年, p. 24。
- (12) 同前。
- (13) 内田青蔵「再生建築小史」足立裕司他『再生名建築 時を超えるデザイン I』鹿島出版会, 2009年, p. 189。
- (14) 難波和彦「リノベーションは『注視』から出発する」『建築文化』Vol.58 No.666, 彰国社, 2003年, p. 118。及び, 五十嵐太郎「多様化するリノベーション—異分野とのクロス」『都市問題』Vol.99 No.1, 財団法人 東京市政調査会, 2008年, p. 63 参照。
- (15) 当時の建築家は, ジャイルズ・ギルバート・スコット (Giles Gilbert Scott) である。(Jane Burton & Simon Bolitho, *Tate Modern Guide*, Revised Edition, London: Tate Publishing, 2009, p. 4, 6. ジェーン・バートン, 本田和美訳『Tate Modern』(日本語), Tate Publishing, 2006年, p. 4, 6 参照。)
- (16) 清家剛・角田誠「優れた再生事例に学ぶ」松村秀一 (編修委員長), 佐藤考一他 (編修委員)『建築再生の進め方—ストック時代の建築学入門—』市ヶ谷出版社, 2007年, p. 34。Frances Morris, “From Then to Now and Back Again: Tate Modern Collection Displays”, ed. Frances Morris, with essays by Michael Craig-Martin, Andrew Marr & Sheena Wagstaff & a special foreword by Nicholas Serota, *Tate Modern: The Handbook*, Second Revised Edition, London: Tate Publishing, 2010, p. 25 参照。

- (17) Jane Burton & Simon Bolitho, op. cit., p. 6. 前掲『Tate Modern』(日本語), p. 6 参照。
- (18) 前掲『進化する美術館—フランス革命から現代まで』p. 125。
- (19) セント・ポール大聖堂は 604 年に現在の場所に建てられたが、現在の大聖堂は、以前の建築物がロンドン大火で崩壊した後、1675 年から 1710 年に建てられたものである。(St Paul's Cathedral ホームページ, <http://www.stpauls.co.uk/Cathedral-History>, 2011.4.14 閲覧。)
- (20) “Punta della Dogana- Chronology”, Punta della Dogana / Palazzo Grassi, François Pinault Foundation, Mapping the Studio, Artists from François Pinault Collection, Opening on June 6th 2009, Press Kit, p. 14.
- (21) 安藤忠雄建築研究所・安藤忠雄／岡野一也, 筆者に対する回答文書, 2010.10.18。
- (22) 宗田好史『にぎわいを呼ぶ イタリアのまちづくり 歴史的景観の再生と商業政策』学芸出版社, 2000 年, p. 138。(これに関しては、「1970 年代末の都市計画で歴史的都心部を現状維持とし、容積率のいたずらな変更を認めなかったこと、つまり実質的なダウンゾーニングが、都心の経済活力を奪うことなく、都心の再活性化に効果があったことを意味」とされており、まちの様子を“変えない”ことによって生じる価値を見出す姿勢が読み取れる。(同前, p. 138。))
- (23) 例えば、コンクリート等の素材が挙げられる。(安藤忠雄『安藤忠雄の建築 0』TOTO 出版, 2010 年, pp. 298-309. 安藤忠雄(タイトル不明)二川幸夫編『GA Document』No.109, エーディーエー・エディター・トーキョー, 2009 年, p. 88. “The Renovation Project” op. cit., Punta della Dogana / Palazzo Grassi, François Pinault Foundation, Mapping the Studio, Artists from François Pinault Collection, Opening on June 6th 2009, Press Kit, pp. 11-13 参照。)
- (24) Francesco Dal Co, “From Dogana da Mar to Museum. Punta della Dogana, Venice, Tadao Ando and François Pinault”, Francesco Dal Co, Traduzioni / Translation / Traduction, Suzel Berneron et al., *Tadao Ando per François Pinault dall'Ile Seguin a Punta della Dogana / Tadao Ando for François Pinault from Ile Seguin to Punta della Dogana / Tadao Ando pour François Pinault de L'île Seguin a Punta della Dogana*, Terza Edizione / Third Edition / Troisième Édition, [Electaarchitettura]: [Milano], 2010 c2009, pp. 24-25, 及び, Jean-Jacques Aillagon, “François Pinault, from One Island to the Next, the Same Passion”, *Punta della Dogana / Palazzo Grassi / François Pinault Foundation*, English Version, Beaux Arts Éditions / TTM Éditions: Paris, c2009, pp. 6-8 参照。
- (25) 入善町下山芸術の森発電所美術館ホームページ, <http://www.town.nyuzen.toyama.jp/nizayama/shisetsu.jsp>, 2010.9.13 閲覧。これに関しては、1925 年建設とするものもある。(矢後勝「発電所の痕跡を残した美術館への再生計画」前掲『再生名建築 時を超えるデザイン I』p. 104, 及び, 中森勉「産業遺産を経過も含めて保存する」同前, p. 111。)
- (26) 入善町教育委員会事務局主任学芸員(当時)・長縄宣, インタビュー, 2010.9.14, 及び, 前掲「産業遺産を経過も含めて保存する」p. 113 参照。
- (27) 長縄宣「この空間とともに—実験的創造空間の 10 年」入善町 下山芸術の森 発電所美術館編(谷新・柳原正樹・長縄宣(執筆), ジャニス金光(翻訳))『発電所美術館 活動記録 Nizayama Forest Art Museum 1995-2004』財団法人入善町文化振興財団, 2005 年, p. 93. 前掲, 入善町教育委員会事務局主任学芸員(当時)・長縄宣, インタビュー, 2010.9.14 参照。
- (28) 「入善町下山芸術の森アーツスペース(旧下山発電所)」は、1996 年に登録有形文化財(建造物)に指定されている。(文化庁ホームページ, http://www.bunka.go.jp/bsys/maindetails.asp?register_id=101&item_id=00000039, 2010.10.20 閲覧。前掲「この空間とともに—実験的創造空間の 10 年」p. 93 参照。)
- (29) 前掲, 安藤忠雄建築研究所・安藤忠雄／岡野一也, 筆者に対する回答文書, 2010.10.18。
- (30) 例えば, テート・モダンの来館者数(2009.4-2010.3)は、4,788,000 人である。(Tate ホームページ, “Visitor Figures / April 2009–March 2010”, Tate Report 09–10, [p. 43], http://www.tate.org.uk/about/tatereport/2010/Tate_Report_2009-10.pdf, 2010.4.12 閲覧。)
- (31) 前掲「いま, なぜコンバージョンか」pp. 24-25。
- (32) しかしながら, 中川理は、ヨーロッパでの美術館として建築物が再利用に関して、日本でみられる「まち

づくり」からの要請という背景が希薄であるとし、ルーヴル美術館やオルセー美術館等のように、ヨーロッパの美術館は、「伝統的に、何らかの歴史的価値を持った建物を美術館建築として使ってきた」ことを指摘している。（前掲「まちづくりから求められる美術館」p. 190。）

- ③③ “Tate Gallery of Modern Art”, *Tate Report: Tate Gallery Biennial Report 1994-96*, London: Tate Gallery Publishing, 1996, p. 24.
- ③④ 例えば、テート・モダンに隣接するバンクサイド・ギャラリー（Bankside Gallery）等のギャラリーもあり、作品（アート）を媒介に地域が変容していると言える。
- ③⑤ Palazzo Grassi / Punta della Dogana, Marco Ferraris, インタビュー, 2010.8.23（現地時間）参照。
- ③⑥ 前掲, 安藤忠雄建築研究所・安藤忠雄／岡野一也, 筆者に対する回答文書, 2010.10.18。
- ③⑦ サイトスペシフィックとは、「場の特異性」であり, 「特定の場所, 特定の空間と分かちがたく結びつき, そのような不可分の関係性の中で成立する美術作品のあり方を指す」とされる。（暮沢剛己「サイト・スペシフィック site specific」暮沢剛己編『現代美術を知る クリティカル・ワーズ』フィルムアート社, 2002年, p. 89。）
- ③⑧ 前掲, 安藤忠雄建築研究所・安藤忠雄／岡野一也, 筆者に対する回答文書, 2010.10.18。
- ③⑨ 同前, 安藤忠雄建築研究所・安藤忠雄／岡野一也, 筆者に対する回答文書, 2010.10.18。
- ④① Ben Weinreb, et al., *New Photography by Matthew Weinreb*, *The London Encyclopaedia*, Third Edition, London: Macmillan, 2010, p. 552.
- ④② 前掲, 入善町教育委員会事務局主任学芸員（当時）・長縄宣, インタビュー, 2010.9.14。また, 発電所美術館は, 平成22年度「地域創造大賞（総務大臣賞）」を受賞し, 「天井高10メートルという歴史的建造物の魅力的な大空間での滞在制作を実現し, その場所でしかできない先鋭的な展覧会により, 現代アートの可能性を拓くとともに入善町の名前を全国に発信した」とされる。（「地域創造大賞（総務大臣賞）発表」『地域創造レター』No.189, 財団法人地域創造, 2011年, pp. 4-5。及び, 前掲, 入善町下山芸術の森発電所美術館ホームページ, <http://www.town.nyuzen.toyama.jp/nizayama/index.jsp>, 2011.4.14 閲覧参照。）

〈付記〉

本研究は, 科学研究費補助金（若手研究（B）課題番号：20730514）「美術館と公共性に関する研究—美術館建築による開放性の創出に着目して—」の研究成果の一部である。